舟運で栄えた平方の町場
～平方河岸～

写真1　平方村河岸出入商人衆奉納の石祠（中央の物）

写真２　町場化したかつての平方上宿周辺

江戸時代の関東における舟運と河川改修は、大量の年貢米や江戸の消費物資を輸送する手段として、江戸幕府により寛永期（1624～1644年）以降に急速に整備が進んだ。利根川と荒川の瀬替え工事によって江戸に結集する舟運路も整備され、荷物を上げ下ろしする河岸が各地に造られた。市域では荒川の平方河岸の他、その上流に位置する畔吉河岸が造られた。また見沼代用水を利用した舟運による河岸も、上瓦葺で営まれていた。

平方河岸は荒川の中流域にあたる平方に設置された河岸で、対岸は川越の老袋である。ここは旧県道川越上尾線が通り、岩槻や原市方面から川越を経て、多摩方面へ通じる道筋にあった。

平方河岸の歴史は古く、正確な成立年代は不明であるが『寺尾河岸場由来書』（『川越市史資料編近世Ⅲ』河野家文書）によると、寛永一五（1638）年以前には設立されていたと考えられている。また平方河岸の舟運を利用した積み出しに関する最も古い記録は、天保二（1682）年の『年貢請負証文』（さいたま市島村家文書）である。そこには平方河岸の問屋甚五右衛門が大和田村（さいたま市）からの物資を、平方から江戸に送っていたとある。このように平方河岸は江戸廻米の集荷先として、平方周辺の村々の他、南村、久保村、原市村などの幕府直轄地や、弁財村、戸崎村、上瓦葺村などの旗本知行地といった地域からも広く利用されていた。

『新編武蔵風土記稿』の平方村の記述によると、江戸時代後期には荒川を通る船が集まる所としてすでに賑わいを見せていたことが分かる。農村・都市の変化に伴って商人の荷物が増加し、年貢の他に穀類やしょうゆ、酒などの商荷も上げ下ろしされた。繁栄のお礼と今後の輸送の安全を願い、奉納された石祠が橘神社にある（**写真1**）。また上尾や桶川で盛んだった紅花の輸送も、運賃が陸送の半分であった舟運が多く利用された。明治の初めには、船積問屋は6軒あり、平方下宿・上宿は次第に町場化した（**写真2**）。営業税である賦金は上尾宿・原市町を上回り、上尾市域40宿町村で最も多く、また明治20年初期には荒川で一番栄えていた戸田河岸をやや上回る実績も残している。

その後、河川改修や入間大橋の建設や大正末のトラックの出現などにより、昭和初期まで続いた平方河岸は終幕を迎える。舟運により栄えたこの町場の活気は、今も「どろいんきょ」に受け継がれている。

（上尾市生涯学習課）

コラム column　平方の渡しと開平橋

平方河岸のやや上流には「平方の渡し」があった。この渡し場は、中山道と川越を結ぶ重要な渡船場で、安政五（1858）年に記された資料により、馬蹄寺持ちであったことが分かっている。

明治16年に埼玉県に出された『船橋架設之儀御願』で有料の船橋が完成したことによって、緊急時を除き渡船が廃止された。この船橋が「開平橋」と命名された。東京から高崎までの鉄道の開通による陸上交通の増加を予想し架設された開平橋は、10艘の船の上に橋桁を載せて作った船橋であった。また川を行き交う船の妨げになるときは、東端から2番目の船が6間分回転し、橋が水平に開くようになっていた。

その後、明治43年の大洪水で船橋が破壊され流出したことを契機に板橋に、昭和27年に冠水橋となり、昭和52年には南側に現在の永久橋である開平橋が開通した（**写真3**）。それまでの開平橋は昭和60年に撤去され、現在に至る。現在の開平橋の北側、荒川の川岸の少し下がった場所に、かつての開平橋が架けられていた名残をとどめている。

写真３　旧開平橋を行き交う人とその上に架かる新開平橋（昭和 47 年撮影）